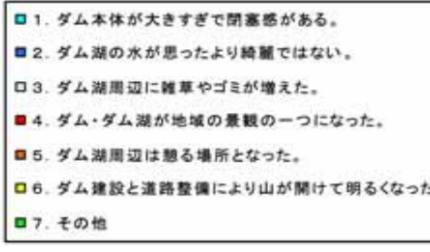
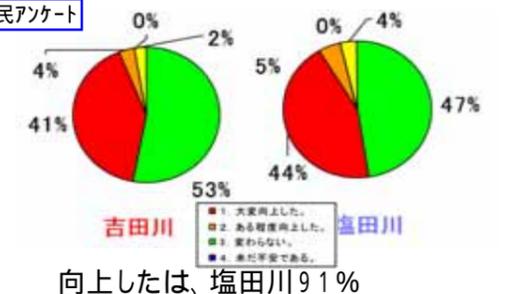
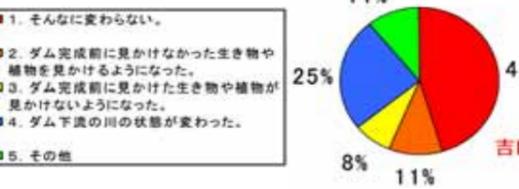


	(1) 事業概要	(3) 事業を巡る社会経済情勢の変化	(4) 事業により整備された施設の維持管理状況	(5) 県民の意見	
横竹ダム建設事業	<p>地区名 横竹ダム</p> <p>工期 ・当初工期 S62 ~ H9 ・変更工期 S62 ~ H13</p> <p>総事業費 ・当初事業費 200億円 ・変更事業費 244.7億円</p> <p>事業内容 重力式コンクリートダム 堤高 57.0m 堤長 249.0m 堤体堰 176千m³ 総貯水貯水容量 4,290千m³</p> <p>背景・目的 塩田川及びその支川の吉田川流域は、従来から出水のたびに大きな災害が発生してきた。このため、塩田川では、上流ダム群(現計画:3ダム)の一つとして、岩屋川内ダムを建設した。さらに今回、横竹ダムを建設して、吉田川の洪水被害を軽減させると共に、塩田川の治水安全度を向上を図った。</p>  <p>●令和5年9月災害 濁流・住宅地のむ 相次ぐ堤防決壊 中心部一面の海 住民2千人が避難</p> <p>また、塩田川及び支川の吉田川は流域の河川水の利用により、本来河川役割である動植物の生息・生育環境の保全に要する流水が不足することがある。そのため横竹ダムを建設し、吉田川における必要流量の確保を図った。</p>	<p>人口及び世帯数の変化 (嬉野市・塩田町) ・人口 S62……32,852 H19……29,644 3,208 9.8%減 ・世帯数 S62……8,601 H19……9,379 778 9.0%増 (推計人口資料より) ・上記によれば、核家族化が進み洪水防御対象である家屋が多くなっていることが想定できる。</p>	<p>ダム管理 平成13年～平成15年 鹿島土木事務所 平成16年～平成18年 西部地区ダム事務所 平成19年～ ダム管理事務所</p> <p>・ダム管理は、一般の河川管理施設に比べて電気通信・機械等の操作を伴う構造物であり、その操作や点検、維持管理にはかなり専門的な知識を必要とする。 そのため県では、平成15年に県営ダム管理をダム建設西部地区ダム事務所に統合させ維持管理の充実を図った。</p>	<p>(嬉野町嘱託員聞き取りにより) ・ダム完成により、洪水の心配がなくなった。 以上が大半の意見であった。 また、ダム直下の吉田川流域より、塩田川沿川の方が、横竹ダムの洪水調節効果を期待している。 *完成後、大きな洪水が発生していない。 (住民アンケートにより) ・ダム本体とダム湖の景観(風景)について、建設前後を比較してどう思いますか。</p>  <p>1. ダム本体が大きすぎて閉塞感がある。 8% 2. ダム湖の水が思ったより綺麗ではない。 2% 3. ダム湖周辺に雑草やゴミが増えた。 10% 4. ダム・ダム湖が地域の景観の一つになった。 12% 5. ダム湖周辺は憩い場所となった。 23% 6. ダム建設と道路整備により山が開けて明るくなった。 17% 7. その他 28%</p> <p>ダムが出来て悪くなった意見 1 + 2 + 3 = 24% ダムが出来て良くなった意見 4 + 5 + 6 = 68%</p>	
	<p>(2) 事業による環境の変化</p> <p>生活環境 ・塩田川・吉田川の洪水被害が軽減された。 住民アンケート</p>  <p>吉田川 41% 53% 塩田川 47% 44%</p> <p>向上したは、塩田川91% 吉田川94%</p> <p>・田植え等の農作業において水不足になることがなくなった。(区長への聞き取り)</p>	<p>自然環境 ・吉田川の洪水が減少したためかヨシが増えた。</p>  <p>1. そんなに変わらない。 25% 2. ダム完成前に見かけなかった生き物や植物を見かけるようになった。 45% 3. ダム完成前に見かけた生き物や植物が見かけなくなった。 11% 4. ダム下流の川の状態が変わった。 8% 5. その他 11%</p> <p>「ダム下流の川の状態が変わった。」の多くの回答は、「ヨシが増えた。」であった。 アンケートの3の内容は、「フナ・ドジョウ」が多く改めて、内水面漁協関係者に聞き取った。「洪水の減少による淵の減少」である事を聞き取った。</p>	<p>(6) 事業の効果</p> <p>洪水調節 塩田川 不動ダム(予備調査中) 岩屋川内ダム(既設) 横竹ダム 塩田橋基準点 (単位: m³/s) () 基本高水ピーク流量 () 最大放流量</p> <p>・50年に一回程度発生する大雨に対して計画している。ダム地点で235m³/sの洪水を210m³/s低減させ25m³/sを放流することにより、下流の吉田川・塩田川の洪水被害の低減を図る。なお、現在の2ダムでは塩田橋地点で、300m³/sの洪水低減が見込め、計画洪水は河川の余裕の中で流下させることが出来るようになっている。 完成(H14年)後、は大きな洪水に見舞われていない。</p> <p>河川流量の安定 利水基準点(一本松) 対象かんがい面積 152ha 塩田川 横竹ダム ダム地点の河川補給 平成17年かんがい期 ダム流入量 ダム放流量 17年5月 H17年7月 H17年9月 H17</p> <p>概ね、毎秒0.15m³の補給かんがい面積で約65ha分(減水深20mmロス込み)</p>	<p>(7) 地域住民との関わり ・洪水に関する関わり ダムが出来たことにより洪水回数が減少し、地域の方々の危機意識に関する意識が薄れていくことが懸念されるため、直近の全国の洪水被害の状況や横竹ダムの洪水調節機能及びサイレン等の連絡体制など定期的に説明会を実施する必要がある。</p> <p>・河川水の利用に関する関わり 横竹ダムは、10年に1回程度発生する湯水に対し、水稻などの利用水量を考慮して、河川維持用水を確保できるように水を貯留する。そのため、水不足となる頻度が減少し、節水意識が薄れていく。そのため、日頃から利水関係者との交流を持ちながら、水の効率的な利用の促進を図っていく必要がある。</p>	<p>(8) 今後の課題 洪水に対する意識の薄れ 水の効率的な利用の啓発 ・「地域住民との関わり」でも取り上げている懸念(危機・節水意識の薄れ)もあることから、「地域住民の関わり」の強化」を今後は図っていく。</p> <p>適切な維持管理 ・ダムは、多くの機器・機械を用いて運用している。この機能を長年にわたり正常に作動させる。 ・ランニングコストを考慮した「アセットマネジメント」を検討していく。なお、このことに関しては、国がH20から検討することになるため、その検討状況を見ながら、作業を行う予定である。</p> <p>(9) 新規評価、再評価への反映、改善点等 ・洪水に対する危機意識は、その経験が少なくなれば薄れていく。これを評価指標とするのは、参考程度にしたい。 ・計画段階から流域住民や水防組織との意識の共有と連絡体制の強化</p>